

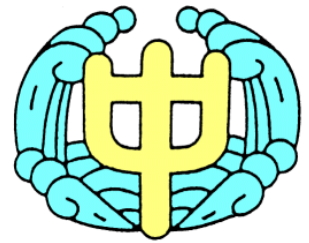
学校と家庭

真理 ・ 感性 ・ 実践

平成29年 11月 1日発行

さいたま市立岸中学校・岸中学校PTA

<http://kishi-j.saitama-city.ed.jp/>



第408号

「生きるということ」

校長 星野 貞邦

日々、校庭の木々の葉が鮮やかな黄紅色に変わり、秋の深まりを感じる季節になりました。生徒たちの活躍が止まりません。吹奏楽部の全国大会出場に続いて、理科部が埼玉県科学振興展覧会で優秀賞に輝き、全国大会にあたる日本学生科学賞への出展が決まりました。市大会、県大会（関東大会）を経て、全国大会に進むことは並大抵のことではありません。誠にとおめでとうございます。また、埼玉県発明創意工夫展では2年生の福櫻遥一君の作品が埼玉県発明協会特別賞に輝きました。運動部では、1・2年生にとっては最初の大きな大会となる新人体育大会が終わり、先日行われた賞状伝達式では延べ17名の生徒に賞状を渡すことができました。（大会の結果は学校だよりの別紙に掲載しております。）さらに、さいたま市駅伝大会での昨年度の成績を大幅にアップした結果を残してくれました。子どもたちの頑張りに心から敬意を払います。

さて、話は変わりますが、今年も10月27日（金）から11月9日（木）までの2週間、全国読書週間が始まりました。本校でも10月27日（金）から約1か月間「岸中読書月間」として取組みます。多くの生徒が本に触れ自分の生き方を考える本との出会いがあることを期待します。私も秋になって「小児病棟の四季」（小児科医：細谷亮太氏）という本を読みました。この本を読もうと思ったきっかけは、教え子の医者として久しぶりにあったことでした。昔話をしている中で、彼は小児科医として、病院の小児病棟で勤務しているとのことでした。小児病棟では、うまく治療ができて元気に退院していく子どももいますが、小児がんのように助からない不治の病をもった子どもたちも多く、彼は医者として、日々子どもたちの病と闘いながら、子どもたちに少しでも長く生きてほしい、できるだけ苦しめないで天国に旅立って行ってほしいと願って、いつも治療を行っているそうです。生きたくても生きることができないことの悲しさ、虚しさ、残酷さ、父親、母親や家族の気持ち、子どもの気持ちなど、考えさせられることがたくさんあるということでした。そこでは、昼間泣いている親はいないそうです。せめて今、いい思い出を作ってあげようと一日一日を過ごしていて、夜には枕もとで「丈夫に生んであげなくてごめんね」と声を殺してすすり泣く声があちらこちらで聞こえてくるそうです。また、7歳で亡くなった一人の男の子の夢は「大人になること」ということでした。無邪気に喜んでいる子ども、日頃泣けない家族の人たち、そういうたくさんさんの思いが満ち溢れている小児病棟の中にいる教え子の彼は、「今を大切に生きなければ」と強く感じたそうです。それは、幼くして亡くなる子どもたちを見て、頑張って生きようという思いではなく、しっかりと生きていかなければ、親から与えられたこの命を大切にできないと日々感じるようになったと言っていました。

この話を聞いて、いろいろな人の思いを受け止めることで、人間は生きている価値を感じるのだと強く思いました。また、生きることは楽しいことも、苦しいことも、様々なことがあり、それが生きているということだと改めて感じました。君たちにとっても、親がいて、学校に通って、部活が出来て、なんでもないことが「幸せ」とういことかもしれません。このようなことがあって「小児病棟の四季」という本を読み、さらに、いろいろな事を考えさせられました。秋の夜長に、自分の生き方を考える本との出会いがあることを期待しております。

